『スラヴ文化研究』Vol.18 (2020) pp.38-54

東京外国語大学付属図書館所蔵 ロモノソフ『ロシア文法』について

恩田義徳

《要旨》

東京外国語大学付属図書館には 18 世紀に出版されたロモノソフの『ロシア文法』が所蔵されている。前の所有者は明治時代の新聞記者である播磨楢吉であり、彼の死後、他の稀覯書とともに同図書館に納められた。『ロシア文法』はロシア人の手によって書かれた最初のロシア語の文法として知られており、ロシア標準語史または 18 世紀ロシア文化における重要な史料である。『ロシア文法』は初め 1757 年に出版され、1765 年には改訂版が出た。ロモノソフの死後、1771 年、1777 年、1784 年の 3 回出版されている。東京外国語大学付属図書館の『ロシア文法』には奥付などがなく、出版に関する情報は不明である。しかし、口絵が無いこと、いくつかの語において ѣ ではなく e を使用している点はこれが初版ではないことを表わしている。また内表紙に出版所の記載がないことからロモノソフの死後、1771 年以降に出版された版であることがわかる。

《キーワード》

ミハイル・ロモノソフ、ロシア文法、18 世紀

1. はじめに

東京外国語大学附属図書館には 18 世紀に出版された、ミハイル・ロモノソフの『ロシア文法 Россійская грамматика』のオリジナル[1]（Original edition 以下、O）が所蔵されている。『ロシア文法』はロシア人の手によって書かれ、出版された初めてのロシア語の文法書として名高く、ロシア標準語史上、また 18 世紀のロシア文化を知る上で第一級の資料である。『ロシア文法』は現代の正書法に校訂されたもの[2]（The Complete Works of M.V. Lomonosov 以下、C）のほかに、旧東ドイツ地域のライプツィヒから 1970 年代にファクシ

[1] *Ломоносов, М.* (1755) Россійская грамматика. СПб.

[2] *Осипов, Ю.С.* (ред.) (2001) «Российская грамматика». М.В. Ломоносов Полное собрание сочинений в десяти томах (2-е изд.) т. 7, С. 305-461. М-СПб.

恩田義徳：東京外国語大学非常勤講師

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https:creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ミリ版[3]が出版されている（Facsimile edition 以下、F）。現在、もっともひろく普及していると考えられる F と O とを較べると、本文の体裁が異なっていて、明らかに組版が違うことがわかる。しかしながら O にも F も現代の出版図書にあるような奥付は付されておらず、版の種類や、正確な出版年などの詳細は分からない。本研究は本学図書館所蔵の O について紹介し、また F、C との異同を比較することで『ロシア文法』の版による違いについて考察することを目的とする。

2.『ロシア文法』とロモノソフ

2-1. ロシア語史における『ロシア文法』

初めにロモノソフの『ロシア文法』がロシア語史上どのような意味を持つのか、背景となるロシア語の書き言葉の歴史を概観する。[4]

2-1-1. キエフ・ルーシ、モスクワ公国期

9 世紀半ばにギリシア人僧侶コンスタンティノス＝キュリロスと兄メトディオスらによって制定された古教会スラヴ語（Old Church Slavonic, 以下 OCS）は正教の教えと共に広くスラヴ地域に伝播し、10 世紀にはブルガリアを経由してルーシの地にもたらされる。OCS は早い段階から東スラヴ口語の特徴を吸収し、例えば鼻母音を喪失するなどして「ロシア化」[5] された OCS、すなわち古ロシア語（Old Russian, 以下 OR）へと変容してゆく。

タタールのくびきからの解放後、ルーシの中心となったモスクワ公国においてもキエフ・ルーシの伝統的文章語（OR）が継承され、モスクワ公国の口語（大ロシア語）の影響や「第 2 次南スラヴの影響」を受け、さらに変質してゆく。また、国土の拡大、行政システムの複雑化に伴い、あらたに「事務行政文体」の書き言葉が成立する。この時期話ことばと書きことばの乖離は大きく、ルドルフ（独）の『ロシア文法』[6] には「ロシア人の間で言われることころでは、話すのはロシア語で、書くのはスラヴ語で行われる」[7]とある。

---

[3] Россiйская Грамматика Михайла Ломоносова. (1755) (Reprinted 1972, Leipzig).

[4] ロシア標準語の歴史についてはおおむね *Винокур, Г.О.* (1945) Русский язык – Исторический очерк. M.に従うものとする。

[5] 術語の日本語訳については基本的に木村彰一（1985）『古代教会スラヴ語入門』白水社、ないし佐藤純一（2012）『ロシア語史入門』大学書林、に従うものとする。ただし「スラブ」は「スラヴ」で統一する。また、伝統的に「ロシア」としてきた訳語は、場合によって「ルーシ」と訳す方が適切であると考えられるが、本稿では慣例に従う。

[6] Heinrich Wilherm Ludolf (1696) *Grammatica Russica.* Oxford. (Reprinted 1959, Oxford)

[7] 日本語訳は佐藤（2012: 187）による。

2-1-2. 18 世紀以降

17 世紀後半、ピョートル 1 世が即位し、絶対主義帝政が確立すると、強力なリーダーシップのもと、西欧に範をとる近代化がすすめられた。教会組織が再編され、科学アカデミーが創設された。この時期、西欧から流入する経済・科学・技術の文献の翻訳を通して「事務行政文体」に西欧語的要素が取り込まれる。書きことばにおいて伝統的文語は教会のことば（聖）となり、それ以外のことば（俗）との間で区別されるようになった。

この時期ロシア語は、ピョートルによる文字の改革、トレジアコフスキーらによる正書法をめぐる議論などを通して、標準語としての整備がすすめられた。文学においてもかつての規範であった教会文献からの離脱の動きが起こり、新しい潮流（恋愛・冒険モチーフ）が登場した。日常語、西欧語の書き言葉への流入が進み、日常語への書き言葉の流入（流出）も起こり始めた。さまざまの要素が混乱する中で、「国民共通語」を整備することが喫緊の課題となった。この共通語制定のさまざまな流れの中で、ロモノソフは教会スラヴ語とロシア口語の融合を来るべきロシア語の核として認め、1757 年、目指すべきロシア語の姿を提示すべく『ロシア文法』を刊行する。

ピョートル文字改革から始まった 18 世紀のロシア語改革は、ロモノソフ『ロシア文法』によって文法規範が提示され、『ロシア・アカデミー辞典』によって語彙の規範が提示された。しかし、まだ一部の作家のみが意識し、机上の空論的であったこれらの規範はカラムジンによる実践的な「文体改革」を経て、プーシキンによる理想的な言文一致の具体的見本の提示へとつながってゆくこととなる。

2-2. ミハイル・ロモノソフ

『ロシア文法』の著者ミハイル・ワシリエヴィチ・ロモノソフ Михаил Васильевич Ломоносов[8] は 18 世紀ヨーロッパに特徴的な博物学者で、言語学、化学、物理学、歴史学、地理学者、天文学者、モザイク画家など多方面での業績があり、プーシキンをして «*Он создал первый университет. Он, лучше сказать, сам был первым нашим университетом*»「彼は最初の大学を創立した。というよりも彼自身がロシアで最初の大学であったというべきだろう」と言わしめた。[9]

ロモノソフは 1711 年 11 月 8 日アルハンゲロゴロド県ミシャンスカヤ村（現ロモノソフ村）に生まれ、漁師である父の仕事を手伝っていたが、1731 年モスクワの学校スラヴ・ギ

---

[8] ロモノソフの略歴については *Карпеев, Э.П.* (1999) Ломоносов Краткий энциклопедический словарь, СПб. С. 7-10.

[9] *Пушкин, А.С.* (1834) Путешествте из Москвы в Петербург. ただし表記は現代のものに改めた。

リシア・ラテンアカデミー[10]に入学する。キエフ・モギラ・アカデミー、[11] スラヴ・ギリシア・ラテンアカデミーを経て、奨学金付きでペテルブルグの科学アカデミー大学部へ入学。ドイツへ留学生として派遣され、化学・鉱物学の研究に従事し、また、英・仏・伊などの外国語を学んだ。帰国後は科学アカデミーに勤務し、1742 年に物理学助教授へ、45 年にはロシア人として初めて科学アカデミーの教授（化学講座）に就任する。それまでにも詩作に関する業績があったが、ロシア国民共通語制定をめぐるの動きの中で、トレジアコフスキーとの正書法をめぐる論争を行い、1757 年にアカデミー印刷所より『ロシア文法』刊行する。また文体論についてもいわゆる「三文体説」[12] を発表し、後の作家、文化人、アカデミーの辞書編纂に大きな影響を与えた。1765 年ペテルブルグの自宅にて歿。アレクサンドル・ネフスキー修道院に埋葬される。

2-3. 『ロシア文法』《Российская Грамматика》

1757 年ペテルグルグのアカデミー印刷所より刊行された。表紙には 1755 年とあるが、実際の刊行はその 2 年後である。これはロモノソフが原稿をアカデミーの事務局に提出したのちも手を加え続けたことによる。[13] ロモノソフとしてはアカデミーの公認を得ていわゆる「アカデミー文法」として出版することを希望していたようだが、対立する立場からの妨害によりかなわず、ロモノソフの個人名での出版（«Российская грамматика Михаила Ломоносова»「ミハイル・ロモノソフのロシア語文法」）となった。[14] それまでの教育現場で主流であったスモトリツキーの『スラヴ文法規則集成』、[15] すなわち教会スラヴ語の文法を駆逐し、19 世紀後半にいたるまで「標準的」文法書として使用された。

冒頭、当時生まれたばかりのパーヴェル（のちのパーヴェル 1 世）への献辞があり、次いでロシア語の由緒と格調をたたえる有名な序文 [16]がある。

---

[10] Славяно-греко-латинская академия

[11] Киево-Могилянская академия

[12] 「三文体説 Теория трех стилей」とは教会スラヴ語に由来する「高位文体」は頌詩、英雄詩、慶祝などに用い、喜劇、歌謡、日常書簡には非教会的（＝純ロシア語的）な「低位文体」を用いる。そして韻文せりふの演劇一般、風刺詩、教育的内容の文書などには両要素の混じる「中位文体」を用いるべきであるという主張。

[13] Осипов (2011: 726)

[14] 佐藤（2012: 209）

[15] *Смотрицкий, М.* (1619) Грамматики славенскиѧправилное сѵнтагма

[16] 以下の個所はとくに有名である「…かつて神聖ローマ皇帝カール 5 世は言った、スペイン語は神と、フランス語は友人と、ドイツ語は敵と、イタリア語は女性と語らうにふさわしい、と。しかしもし彼がロシア語を知っていたならば、そこにこう付け加えたに違いない、ロシア語はそれらのすべてと語らうに適している、と。なぜならロシア語にスペイン語の壮麗さ、フランス語の快活さ、ドイツ語の堅実さ、イタリア語の優美さ、さらにギリシア語・ラテン語の力強い簡潔さと豊かさを

ロモノソフの生前に 2 版（1757 年、1765 年）死後 3 版（1771 年、1777 年、1784 年）[17] が出版され、1764 年には早くもドイツ語へ翻訳されている。『ロシア文法』がロシア社会で 19 世紀に至るまで広く読まれていたことを考えると、これ以降もいずれかの版が再出版されている可能性が高いが、現段階では詳しいことは分からない。

現在、比較的容易に閲覧できるものとしては 1972 年および 75 年にライプツィヒよりファクシミリ版（F）[18] があり、その後も、数回にわたりファクシミリ版が出版されていることが確認できる（1982 年モスクワ、2013 オンデマンド版）[19]。またロモノソフ全集（C）には現代の正書法によって採録されている。

3. 東京外国語大学附属図書館所蔵の『ロシア文法』

3-1. 書誌情報

東京外国語大学付属図書館に所蔵（貴重図書）されている『ロシア文法』は 185×240mm、B5 版（182×257）よりも縦のサイズがやや小さいサイズである。背は布製で、黒い ГРАММАТИКА ЛОМОНОСОВА の文字が横向きに刻印[20]されている。表紙はマーブリングの施されたボール紙製で周辺部分に剥落がある。表紙には書名はない。内表紙には РОССІЙСКАЯ ГРАММАТИКА МИХАЙЛА ЛОМОНОСОВА の文字があり、上部に「播磨楢吉」、書名にかかるようにして「東京外国語大学図書館」の蔵書印が押されている。[21] 印刷所、年号の記載はない（後述）。パーヴェル皇子への献辞 （p. 3）があり、序文（pp. 5-8）、本文（pp. 9-186）と続く。本文には§1 から§587 まで、章をまたぎ全体を通してのセクション番号が振られている。本文最終部に現代のものと思われる 28.8.8 の印がある。これは後述のように東京外国語大学図書館に収蔵された（登記された）日付である。

本文用紙は白色の上質紙、縦方向に紙の漉き目があり、印刷は比較的鮮明。カスレ、活字の欠けなどは目立たない。本文のいたるところに鉛筆とセピア色に変色したペンの書き込み（線引き）があり、かつての所有者（たち）が文法書として使用した形跡がある。これは『ロシア文法』が実用書であったことを示すであろう。

見出したであろうから。…」（恩田訳）

[17] Осипов (2011: 734)

[18] 東京外国語大学図書館にも F が所蔵されている。

[19] 2019 年 12 月 22 日東京外国語大学において開催されたロシア語研究会「木二会」の定例報告会において、それぞれ井上幸義（上智大学名誉教授）、匹田剛（東京外国語大学教授）にご教示いただいた。

[20] 表紙の保護のため、図書館ではビニールのカバーがかけられている。

[21] なお、ページ上部には図書館の蔵書番号を示す「特 680」の文字があり、鉛筆による文字の書き込みも見られる。

全 186 ページであり、目次・正誤表・ロモノソフのエッチングはない（後述）。

3-2. 収蔵に至る経緯

O はどのような経緯で東京外国語大学附属図書館に収蔵されるに至ったのであろうか。図書館の記録によると、昭和 28 年（1953 年）8 月 8 日以前に亀和田末吉氏より購入されたとある。[22] 金額は 25,000 円。昭和 30 年頃の大卒初任給をおよそ 10,000 円として計算すると、令和 2 年現在では 50 万円ほどの金額になるだろうか。内表紙の印から、これがもとは「播磨楢吉」の蔵書であったことがわかる。

なお、この時『ロシア文法』の他に『和魯通言比考』[23]や『ロシア語のいろは』[24]といった書籍も購入している。いずれも稀覯の本であり、現在東京外国語大学図書館貴重書コレクションとして保管されている。

3-3. 播磨文庫

O の蔵書印にある播磨楢吉とはいかなる人物か。彼の蔵書、すなわち「播磨文庫」は一定の知名度を持つコレクションではあるが、その詳細についての情報がすでに得にくくなっているため、ここで改めて解説することは無駄ではないと思われる。黒田（1960 年）[25] に基づいてやや詳しく述べることにする。

東京外国語大学附属図書館所蔵『ロシア文法』の前の所有者、播磨楢吉は明治期のロシア学者・ジャーナリストである。恐らく明治 16、7 年（1883、4 年）ごろ熊本に生まれた。はじめギリシア正教会の司祭、高橋長七郎のもとでロシア語を学び、明治末期に東京出て、ロシア文学の研究を行った。この頃レフ・トルストイの次男イリヤ・トルストイの著作「子の見たる父トルストイ」翻訳する。[26] その後は新聞通信者としてハルビンに 2、3 年滞在し、1914 年に第 1 次世界大戦が勃発すると、時事新報に用いられて、特派員としてペテルブルグに派遣された。1917 年の革命に到る時期を当地で過ごし、時事新報社紙面に多くの

---

[22] O の収蔵経緯を調査するにあたり、東京外国語大学附属図書館に協力をいただいた。対応してくださった職員の方に感謝いたします。

[23] *Гошкевич, И.*(1857) Русско-японский словарь Сост. Тацивана но Коосай.

[24] *Махов, Н.* (1861) Русскаго чиновника подарок японским детям, русская азбука Хакодате.

[25] 黒田乙吉（1960）「播磨文庫について」『びぶろす』国立国会図書館協力部編 11 巻 4 号 pp.16-18。なお、黒田乙吉氏（1888-1971）は新聞記者、評論家で、1917 年のロシア革命時には大阪毎日新聞社の特派員としてペテルブルグに滞在。二月革命、十月革命を報道。戦後はソ連問題研究会専務理事などを務めた。シベリア、北氷洋に関する著作やトルストイの翻訳などの業績もある。

[26] 大正 3 年（1914 年）、新潮社。国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧可能。
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/952052/198（最終閲覧日 2020 年 10 月 15 日）

記事を載せたという。帰国後まもなくして新聞社を退き、外務省情報部や内閣情報局に出仕、公官庁の発行する雑誌にロシア問題、ソヴィエト事情の記事を書いていた。第 2 次世界大戦の気運が高まるころ情報局を退き、以降自宅に籠もって読書・研究の生活に入った。昭和 27 年（1952 年）、胃がんにより逝去。

「播磨文庫」に集められた書籍の多くは 1914-17 年のペテルブルク滞在時に手に入れたものだという。おそらく『ロシア文法』(O) がコレクションに加えられたのもこの時期であろう。書籍のジャンルは広範囲にわたり、政治、経済、法律に加え、地理、ロシア語関係、辞書類、思想、革命に関する資料、ロシア文学、外交、東方事情（中国、モンゴル、極東、シベリア、対日関係）その他ロシア・ソ連研究に必要な資料・文献が集められていた。タタール支配下のロシアの情勢を記した文献は、後に「金帳汗国史」[27]の翻訳 [28]へと結実し、また日本で初めて幕末の日露交渉をロシア側の資料で紹介するなど、「播磨文庫」は播磨氏の研究において不可欠の役を果たしたと言える。

播磨氏の死後、蔵書の一部が『播磨文庫』として国会図書館に納められた。単行本・雑誌を合わせて 1500 部ほどだという。本来の播磨氏の蔵書は 6000―7000 冊ほどであったというから、かなり厳選したコレクションであろう。この時、O[29]を含むロシア語関連図書は「外語大学」[30]の懇望によって同大に譲られた。

納入の年代は東京外国語大学附属図書館の購入記録とも一致する。直接の購入先である亀和田氏がどのような人物であるか、詳細は分からない。

4. 『ロシア文法』の版による差異

冒頭に述べたように東京外国語大付属図書館に保管されている『ロシア文法』(O) と、普及しているリプリント版（F）とでは違いがある。詳しく比較するために、まずは F についての情報を確認する。なお、ここでは 1972 年版を利用する。

4-1. ファクシミリ版（F）の書誌情報

表紙は РОССІЙСКАЯ ГРАММАТИКА МИХАЙЛА ЛОМОНОСОВА、背には ЛОМОНОСОВА・РОССІЙСКАЯ ГРАММАТИКА の印字。内表紙には РОССІЙСКАЯ ГРАММАТИКА МИХАЙЛА ЛОМОНОСОВА ПЕЧАТАНА ВЪ САНКТПЕТЕРБУРГѢ При

---

[27] 黒田（1960）では「金帳汗ロ史」。「ロ」は「国」の略字か。
[28] ヤクボフスキー、グレコフ（共著）播磨楢吉（訳）(1942)『金帳汗国史』生活社。
[29] 黒田（1960: 18）では『ロシア文典』。
[30] 文脈上、当然、東京外国語大学ととらえるべきだろう。

Императорской Академїи Наукъ 1755 года.とある。内表紙の左ページには（神に祝福されながら？）『ロシア文法』を執筆するロモノソフのエッチングがある。次いでライプツィヒでのリプリントの情報（印刷所、発行年＝1972 年）（p. 2）、パーヴェル皇子への献辞（p. 3）と続き、序文（pp. 5-10）のあとには本文（pp. 11-210）が続く。ただし§は 1 から始まるが、最終ページでは§527 である。本文のあとには目次（pp. 211-212）（§ではなくページによる表記）があり、正誤表（p. 213）も付されている。本のサイズは 130×200mm 多少、縮小されている感がある。印刷（コピー）は 1972 年という時代を感じさせる程度に粗く、部分的にぼやけ、文字のかすれあり、時に判読しにくい個所（Ѣ と Ъ の区別がつかないなど）もある。

4-2. ロモノソフ全集版（C）

科学アカデミーによる校訂版で、内容はロモノソフ存命中に出版された最後の版である 1765 年版に基づく。現代の正書法による表記にはなっているが、ロシア語自体はロモノソフの時代のものである。10 巻本の全集（第 2 版）のうち言語に関する業績を集めた第 7 巻に収録され、パーヴェルへの献辞と序文が合わせて（pp. 306-307）あり、本文（pp. 308-461）、別のテキストを挟んで、巻末に本文への注（pp. 722-781）がある。

4-2. O と F および C の比較

4-2-1. 書誌的な差異

上で述べた O、F および C の書誌情報について一覧にすると以下の【表 1】のようになる。

【表 1】O、F および C の書誌情報の比較

	O	F	C
サイズ（mm）	185×240	130×200	160×215
ページ数	186	210	158
内表紙（印刷場所の記述）	なし（蔵書印）	あり	
セクション（§）	1-587	1-527	1-592
もくじ	なし	あり	なし
正誤表	なし	あり	なし
口絵	なし	あり	なし

F と O（および C）を比較して、もっとも大きく異なるのが、ページ数とセクション番号である。ページ数は組版の違いによるため、必然である。F と O とで組版が異なることは使用されている活字が異なることからも明らかである。[31] セクション番号の違いについては、3 つすべてで異なる。テキストをいちいち比較してゆくと、これは単にそれぞれの版の誤植に基づくものであることがわかる。すなわち F と O の差は F のみにおける誤植の結果であり、O と C の差は F と O に共通する誤植の結果である。

なお、C は現代における校訂版であり、セクションの番号は正しく記載されているものと考えられる。詳細は以下【表 2】を参照。

[31] Ц やイタリック体の в の文字、さらに「§」の記号を見る限り、異なるセットの活字が用いられていることがわかる。

【表 2】O、F および C のセクション番号の対応

F	O	C	注
1	1	1	
42	42	42	
44	43	43	Fにおいて43が欠番
45	44	44	
43	45	45	Fにおいて45の後に43
46	46	46	46でそろう
…	…	…	
59	59	59	
57	57	60	F・Oにおいて59の後に57
…	…	…	
100	100	103	
100	100	104	F・Oにおいて100が重複
…	…	…	
133	133	137	
133	133	138	F・Oにおいて133が重複
…	…	…	
471	471	476	
471	472	477	Fにおいて471が重複
…	…	…	
474	475	480	
475	476	481	
477	477	482	Fにおいて476が欠番
…	…	…	
498	498	503	
439	499	504	Fにおいて突然番号がずれる
440	500	505	
441	501	506	
441	502	507	Fにおいて441が重複
…	…	…	
467	528	533	
469	529	534	Fにおいて468が欠番
…	…	…	
527	587	592	最終的にFとOで60、Oと Cで5差が出る

F および O においては上記以外の誤植も存する可能性が高い。また F においてはセクション番号（ないしページ番号）に非常に誤植が多く、百の位の数字が異なる場合など無数に存在する。あきらかに誤植とわかるものについてはここでは考慮に入れていない。

4-2-2. 訂正表に関する差異

F のみに付されている訂正表は、それ自体にミスを含むずさんなもの[32]である。O、C には訂正表は付されていない。簡単にまとめると、O においては F の正誤表の多くは訂正済みであり、C については正誤表の内容はおおむね（1 例を除き）反映された形になっている。

4-2-3. 版ごとの外面的特徴の違い

『ロシア文法』は初版 1200 部を売り切り、それでも購入希望者が多く 1763 年には第 2 版の制作が指示されたという。[33] 1765 年に出版された 2 版は初版と内容面では全く変更がなく外面も初版によく似ていたが、若干の変更が加えられた。ひとつ目は口絵の削除であり、ふたつ目は植字の幅がやや広くなったことであり、3 つ目の違いは紙の透かしである。

このことから、口絵のある F は初版をもとにしたファクシミリ版である可能性が高い。また、初版と 2 版とでは正書法上の差異がある。初版では есть, ехать と綴っていた動詞を 2 版では ѣхать, ѣсть という綴りに変更したという。F の例えば§332 には ехать の語形が見られる。また§417 では Я емъ, Ты ешь...という変化表があり、この点からも F が初版のリプリント版であることがはっきりする。同じ個所を O で確認すると、前者では ѣхать、後者では Я ѣмъ, Ты ѣсшь...という変化表が見られる。第 2 版をベースとした C は当然、ѣ を用いた表記となっている。

ロモノソフの生前に刊行された初版（1757 年）と 2 版（1765 年）にはどちらも内表紙にロモノソフの手写本が初めて活字化された 1755 年という年号と印刷場所の表記がある。すでに述べたように、O にはそれがない。

5. 『ロシア文法』版組の違いについてのまとめ

現在、広く使用されているライプツィヒのファクシミリ版 (F) は口絵の存在、ехать, есть

---

[32] 上述のように『ロシア文法』の出版をめぐっては、訂正作業と印刷作業が同時進行的に行われたことが知られている。訂正表の内容が必ずしも正しくないことの原因はこの点にあると考えられる。
[33] Осипов (2011: 726)

という表記から見て、1757 年の初版をもとにしたリプリント版であると言える。これに対し、東京外国語大学付属図書館所蔵のもの（O）は、口絵の欠如、ѣхать, ѣсть という表記、そして内表紙の印刷所及び年号（1755）の欠如という点から見て 1771 年の第 3 版以降のものと判断することができる。1771 年、1777 年、1784 年のいずれの版であるか、今判断することはできない。ロシア科学アカデミーの図書館には 5 つすべての版が保管されているという。[34] これらと突き合わせることができればはっきりしたことがわかるだろう。

6. 日本における『ロシア文法』の影響

本稿の目的である、東京外国語大学付属図書館所蔵の『ロシア文法』ついては一定の結論を得たが、最後に蛇足を承知で日本における『ロシア文法』の影響の一例を示し、その意義の大きさを確認したい。

日本最初の体系的ロシア語文法書 [35]として『魯語文法規範』（1813 年）があげられる。これは写本の形で伝存し、現在は静嘉堂文庫に保管されている。元来 6 巻本。ただし静嘉堂本は 5 巻が欠けている。著者は江戸時代後期の長崎通詞で蘭学者の馬場佐十郎。かれははじめ幕命によって大黒屋光太夫にロシア語を学び、文化 10 年（1813 年）松前にてゴロヴニンよりロシア語を教授される。ゴロヴニンは 1811 年軍艦ディアナ号にてクナシリに上陸した際、松前藩によって拿捕され、虜囚となっていた。彼は馬場佐十郎、足立佐内にロシア語を伝授することになるが、それに先立ち 2 人のために文法書を執筆する。曰く、「私は多少でも完全な文法書を作る上で役に立つような書籍を手許に持たなかつたので、自分の記憶のうちから取り出せるだけで満足せざるを得なかつた。私は四ケ月以上もかかつてその本を書いた。（中略）彼ら（馬場と足立：引用者注）は大喜びで私のノートを日本語に翻訳し、全部で相当に大部な物であつたが、すぐに訳了した。（後略）」[36]。この時ゴロヴニンが念頭に置いた文法はクルガノフ Круганов, Н.の『作文独習 Письмовник』に含まれるロシア文法で、これはロモノソフの『ロシア文法』の教科書版的なものであったという。これを馬場・足立が翻訳したものが『魯語文法規範』である。

例として時制の分類を比較してみよう。『ロシア文法』では 1) настоящее「現在」 2) прошедшее неопрделенное「不定過去」 3) прошедшее однократное「一回過去」 4) давнопрошедшее первое「大過去第一」 5) давнопрошедшее второе「大過去第二」

---

[34] Осипов (2011: 734)

[35] 岩井憲幸（1989）「いわゆる『魯語文法規範』について―その成立と書名をめぐって―」『明治大学教養論集」217 号、13-45 頁、明治大学。

[36] 岩井憲幸（1998）「日本におけるロシア語学習・研究の最初期について―記述の試み―」『明治大学教養論集」304 号、55-95 頁、明治大学。

6) давнопрошедшее третие「大過去第三」 7) будуще неопределенное「不定未来」
8) будущее однократное「一回未来」 9) прошедшее совершенное「完了過去」10) будушее совершенно「完了未来」の 10 通りに分けられている。[37] これは現代の観点からいえば、時制とアスペクト、動作様態が明確に区別されない分類であるが、その時代性を考慮すればある程度合理性を認めることができる。[38] この分類が『魯語文法規範』（巻 2、27 ウ-29 オ）では次のようになる。[39] 第一 настоящее время 現在、第二 прошедшее не опредѣленное время 過去不定、第三 прошедшее совершенное время 過去、第四 прошедшее однократное время 過去一回時、第五 прошедшее не однократное время 過去数回時、第六 будушее неопредѣленное время 未来不定、第七 будушее однократное время 未来一回時、第八 будушее совершенное время 未来、この他に、其一 прошедшее неокончанное 過去不成、其二 давно прошедшее время 大過去

両者は記述の順番と、過去時制の表記において若干の違いを見せるが、10 の分類である点や、原語の多くが一致する点において関連性があると見てよい。つまり、ロモノソフの『ロシア文法』は日本最初のロシア語の文法書である『魯語文法規範』に、間接的とはいえ、その影響を与えていると考えられる。

---

[37] ロシア語表記は Осипов (2011: 379)による。
[38] 佐藤 (2012: 214)
[39] 『魯語文法規範』については岩井憲幸（2005）「『文法規範』巻 2―翻刻ならびに注―」『明治大学教養論集』388 号、69-109 頁による。

参考資料

1.『ロシア文法』目次

第1課	人間の言語全般について	ページ(F)	§(F)	ページ(O)	§(O)	§(П)
第1章	音声	11	1	9	1	1
第2章	発音と語の不可分の部分	14	12	12	12	12
第3章	語の不可分の部分の組成	19	26	16	26	26
第4章	語の自立部分	23	39	20	39	39
第5章	語の自立部分の組成	38	77	33	77	80
第2課	ロシア語の読み方と正書法について					
第1章	ロシア語のアルファベット	41	84	35	84	87
第2章	ロシア語のアルファベットの発音	54(44)	93	39	93	96
第3章	音節と単語	49	101	42	101	105
第4章	記号類	51	105	44	105	109
第5章	正書法	т а ж ъ	108	44	108	112
第3課	名詞について					
第1章	名詞類の性	62	133	54	133	138
第2章	格変化	64	141	56	141	146
第3章	特殊変化	79	157	70	157	162
第4章	比較級	91	207	81	207	212
第5章	所有形容詞・父称の派生	94	222	83	222	227
第6章	指大形・指小形	99	241	87	241	246
第7章	数詞	101	252	89	252	257
第4課	動詞について					
第1章	動詞の一般的特徴	105	259	93	259	264
第2章	単純動詞の第1変化	111	285	98	285	290
第3章	単純動詞の第2変化	138	360	122	360	365
第4章	混合変化の動詞	151	394	133	394	399
第5章	不規則動詞・不完全動詞	161	416	142	416	421
第5課	補助的品詞について					
第1章	代名詞	644(168)	423	149	423	428
第2章	分詞	175	433	155	433	438
第3章	副詞	180	450	159	450	455
第4章	接頭辞(前置詞)	181	455	161	455	460
第5章	接続詞	831(183)	458	162	458	463
第6章	間投詞	148(184)	462	163	462	467
第6課	諸品詞の連結について					
第1章	諸品詞の連結総論	185	464	164	464	469
第2章	名詞類の連結	188	477	166	477	482
第3章	動詞の連結	192	496	170	496	501
第4章	補助的品詞の連結	200	472	177	532	537
第5章	さまざまな状況での諸品詞の連結	206	506	183	566	571

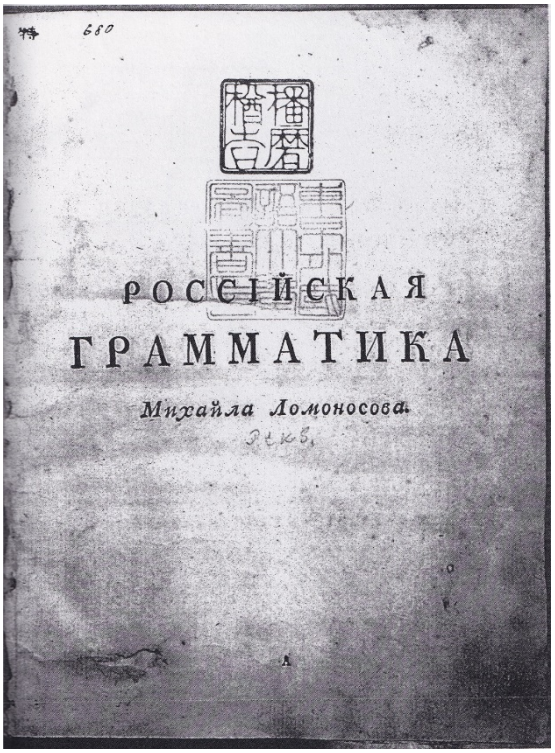
2.『ロシア文法』正誤表

誤植一覧						
ページ	行	§(F)	誤	正	(F)本文	(O)本文
21	5	32	кром	кромѣ.	訂正済み	訂正済み
56	9	115	о многихъ	во многихъ		未訂正
тажъ	17	116	тверьдить	твердитъ		твердить
60	16	128	вноеныя	вносныя	訂正済み	訂正済み
61	5	132	единишный	единительной		未訂正
74	18	154	иное	иную		訂正済み
79	1	156	*женскаго рода средняго рода*	должно вычернить		訂正済み
тажъ	3		*божія божья*			訂正済み
80	8	160	сосемъ?	сосемъ	本文?ではなく！	訂正済み
84	послѣ дняя	インデクス	амъ	тать		–
88	19	193	склопаются	склоняются	本文20行目．訂正済み	訂正済み
92	послѣ дн	215	К на Ч	оное на ЧЕ		訂正済み
141	2	370	опатъ?	спатъ	本文 спалъ?	訂正済み
155	15	401	откинь	откинулъ		訂正済み
160	10	417	повелительное	неокончательное	163ページ12行目	訂正済み
167	11	421	очидиться	очутиться		訂正済み
176	22	437	глагоговъ	глаголовъ		訂正済み
184	–	ページ番号	84	184.	訂正済み	–
тажъ	послѣ дн	本文外	наставленю	наставленю	?ПЯТАГО НАСТАВЛЕНІЯ か？	未訂正
193	9	439	наровъ	народъ		訂正済み(§199)
195	26	448	требуетъ	требуютъ		訂正済み(§509)
198	22	465	хряня	храня		訂正済み(§526)
205	послѣ дняя	500	любзно	любезно		訂正済み

3. 『ロシア文法』ファクシミリ版（F）の口絵、内表紙（印刷所、発行年の記載）

3. 東京外国語大学図書館所蔵『ロシア文法』（O）内表紙

（播磨楢吉、東京外国語大学図書館の蔵書印、印刷所・発行年の記載なし）



Mikhail Lomonosov's *Russian Grammar* in the Tokyo University of Foreign Studies Library

ONDA Yoshinori

The Tokyo University of Foreign Studies Library owns a copy of *Russian Grammar* by Mikhail Lomonosov, published in the 18th century. Its former owner is thought to be a Meiji-era journalist, Harima Narakichi. After Harima's death, it was brought to the TUFS Library with other rare books. *Russian Grammar* is known as the first Russian grammar written by a Russian and is an important material of the history of Russian literary language and Russian culture in the 18th century. It was published in 1757 and revised in 1765. After the author's death, three more editions were published (in 1771, 1777, and 1784). *Russian Grammar* in the TUFS Library does not have a colophon, and the publication details are unknown, but we can estimate them from some features of the book. The lack of a frontispiece for the book and the errata list show that it is not the first edition. Moreover, the use of the letter *ѣ* instead of *е* in some words (*ѣхать ѣсть*) indicates that it is at least the second edition. The omission of the publisher's name from the inner cover means that it belongs to the third edition or later.

Key words: Mikhail Lomonosov, Russian Grammar, 18th century